
ぼっちの俺がスターになるまで

岡崎一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼっちは俺がスターになるまで

【Zコード】

Z0949BA

【作者名】

岡崎一

【あらすじ】

主人公と愉快なぼっちは音楽で学校のスターを目指す話

HAROKE (前書き)

趣味全開で書くバンドもの。

「BECK」 読んだ後なのは関係ないはずである

ヒローゲ

俺には学校に友達がない。
まったくといない。

いじめられているわけではない。

ただ、誰も俺のことを気にしていないのだ。
そう、誰一人でさえ。

朝はギリギリで教室に入る。遅刻はしない。
休み時間は一人でトイレに行つたり、本や雑誌を読んだりしている。
雑誌は校則で禁止されてるが気しない

昼休みは一人で飯を食い、また雑誌か本を読む。
放課後は真っすぐ家に帰る。友達がないので。
ただ、たまに寄り道をする。一人で、近所の本屋に。

それが現役高校生の俺「篠崎 直樹」の高校生活である。

Hプローグ（後書き）

前のが書き終わってないのに新しいのを投稿してしまった・・・友人に「一個終わってから、新しいのを書け」と上から目線で言っておいてこのザマである

第1話 ネットアイドルその1

昨日気付いたことある。

それは、隣のクラスの小山さん（地味系女子　ぼっち）がネットアイドル「ゆゆ」だとこうことにだ。

俺は自分でもかなり空気な方だと自覚しているので、昼休みはちょこちょこ俺の机を使いたいであろうとなり席の女子達に気を遣つて、校内散歩をしたりしている。

すると、やっぱり自分と同じぼっち田^たが行く。

大体クラスに一人はいるようだ。まあ、自分のクラスには俺を含め二人いるが

そして、となりのクラスA組のぼっちは小山さんだ。
なぜ、俺が名前を憶えているかはおなじぼっちだからである。つまり、勝手な仲間意識である。

そして、俺の趣味はネットサーフィンだ。

一昨日の晩何となくニニ動画を見ていたのだが、再生数のランキングのトップを飾つていてある動画を見ていた。

その動画はコスプレをした結構可愛い容姿の女の子がかなりうまい歌声を披露していたのである。

その子が中々に気に入った俺はその子のHPとブログを読んでいた。するとどうだらう、その子は同じ年で、しかも住んでる地域が同じと来た。

そこまで来るかなり親近も湧き、その子のファンになりかかっていた。しかしだ、ブログの過去の記事を読んで行くとその子の学校行事とこの学校の行事が全く同じなのである。

まあ、その程度同じ地域に住んでいたら「良くある話」で済むのだ

が、なんとなく見続けるとその子が読んだ本が紹介していた。

すると、ある日の記事で俺も少し前に図書室で借りて読んだ本を紹介してた。写真に俺の入れたままで図書室に返却してしまったお気に入りの栄が映っていたのである。

その時点で同じ学校のヤツで間違いないのだ。

そうなると、やっぱり誰か気になる。

それで、ジーツとゆゆの写真を見ていると「どうも見たことがある顔だぞ?」となり、それで気がついた、

となりのクラスの小山 悠佳だと。

気が付いた時はかなり驚いた。

あの地味系ばっちガールにこんな秘密があるとは・・・

ネット上の彼女は動画の生配信の見る限りかなり社交的で明るい元気な女の子だった。

それこそ、女子達のグループのリーダーにいそうな。どう見ても、別人だ・・・

でも、その秘密を知った所でどうするもなかつた。

ただ、「驚いた」それだけである。

まあ、学校で言いふらすにも友達がいないのが、

そんな、俺だけが知る秘密にその日が少し機嫌良かつた。

今日の掃除はサボっていてもほとんどバレることのない実質「掃除無し」の図書室前の階段だつた。

しかし、機嫌のいい俺は一人で掃除をしていた。
機嫌良く、一人で箒をはいてた。

気が付いたら上から、分厚い本が俺の頭に目掛けて飛んで来た。

焦つてしまがんで本を避けると、目の前にうつ伏せに倒れている女

の子がいた。

可愛いレースのパンツが見えるのには気付かない振りをしておこう。

「あ、あの、大丈夫ですか？」

本を差し出しながら声をかける。

「うう・・・」

痛そうに呻きながら、立ち上がった女の子は俺の上機嫌の理由、小山さんだった。

「あ、ゆゆ」

なぜか”小山さん”では”ゆゆ”と呼んでしまった俺。

目の前的小山さんの顔が一瞬驚いたお顔になり、だんだんと血の気が引いて行く。

焦つた俺は急いで本を押し付けて、その場を去りうとした。

ガシッ

と俺は足首を掴まれた。

「え？」

「君、今なんて言つた？」

「な、何も言つてないですよ

かなり焦る俺。

「ちょっと、いいかな？」

大人しい地味ガールと思っていた彼女は以外と前衛的だった。

第2話 ネットアイドル その2

そして、その”ゆゆ”こと小山さんに連行されて俺は放課後の誰もいない空き教室にいた。

「ねえ君は確か隣のC組の篠崎君だよね？」

「ええ、まあ、はい。そうですが」

大人しい子だと思っていた彼女からの意外な威圧感に怯えながら話す俺。なさけねえ・・・

「なんで、わたしが”ゆゆ”だって知ってんの？」

「あ、やっぱりゆゆだったんだ」

思わずそう言った俺。

しまった、と焦った顔になつた彼女

「も、もしかして、鎌かけたの？」

かなり怒つてゐようだ。

いや、俺悪くねえし。てめえが、自爆しただけだろ。
とは言えるわけもなくて。

「い、いや違うよ・・・」

と、キヨドリ気味に返すしかなかつた。

「まあ、いいわ。

そんなことより、どうやつてわたしを”ゆゆ”と見抜いたわけ?
見抜いた経緯をやつぱり怯えながら話す俺。勿論、ファンになりかけたのは隠してだ。

「ふう〜ん、あの本がね・・・」

なんだか、考え込んでる様子だ。

「ね、ねえ、あの栄持つてないかな?あれ気に入つててさ」と、聞いていても無視された。

「ねえ、君はこのこと誰かに話さないの?」

「いや、そんなつもりはないよ。」

「そう。」

と、信用して無さげに俺を見る。

「ほ、ほんとだって！そ、それに俺には友達とかいないしさ……」

「ああ、それもそうね」

と、納得したご様子の小山ちゃん。

納得しないでください……はあ……

「でも、それだけじゃあ不安ね……」

「え、はい？」

なんか不穏なことを言い出したぞ？

「あ、そうだ！」

「ねえ、篠崎君あたしの生で何かやつてよーーー！」

「え、あ、は、はい？」

なんか言い出したぞ、この人

「そうよ、共犯になつてもらえばいいんだ。

うん、わたし頭いいわあ

どうしよう、地味系ぼっちガールはとんでもなく前衛的で頭の悪そうな子だぞ？

「で、でもさ、アイドルの君の放送になんの取り柄もない俺が出たら何か言われない？」

よし、もっともらしい言い訳が出来たぞ

てか、なんの取り柄もないって……自分で言つても結構クル
ものがあるぞ……

「え？ あなた楽器できたんじゃないの？」

「へ？」

なんで知ってるの？

「だつて、去年の初めの自己紹介の時に言つてなかつたの？」

「あ、ああ・・・・・

俺はベースが弾ける。唯一の特技で、趣味だ。

去年の1年初めの頃に意気揚々と自己紹介で言つて、内向的なこの学校では「え？ なにあいつ、調子乗つてない？」となり、「しかもベースつて（笑）」となつて俺のぼっちは化を推進したのである。

でも、なぜそんなことをこの女は知っているのか？

「え？ 聞いたのよ、去年。あたしはずっとほつちだつたわけじゃないし」

俺の表情を読んだのかそう言った。

「そうだよな・・・。こんな子がずっとほつちな分けないか・・・」

女子の間で喧嘩でもしたのか？

まあ、聞くのは無粋か・・・

「そ、そりなんだ」

と、しか答えられなかつた。

「で、なんの楽器できるのよ？」

「べ、ベース」

恐る恐る答える俺

「ベースかあ・・・地味ね、見た目と同じだわ」

断言した。

結構ショックだぜ・・・

てか、見た目の地味さはお前にだけは言われたくない！！

「ああ、もう落ち込まないでよ、鬱陶しいから」

ひどい・・・

「まあ、いいわ。そんじゃ、あの栄も渡すし、生に出てもらひし明日家に来てよ」

「は？」

今この女なんて言った？ イヒーハイ？ 馬鹿か？

「てわけで、明日連れてくから。

あ、連絡先交換しどくね」

と、言って何故かポケットにあつたはずの俺の携帯と自分の携帯を操作して勝手に連絡先を交換した。

「また連絡するわね」

そして、出て行つた。

「勝手だなあ・・・」

なんでだろう、女の子と連絡先交換したのに全然嬉しくない・・・

こうして、俺は何故かネットアイドル“ゆゆ”のネット生放送にでる羽目になつた。

第3話 僕のでぶー その1

昨日、連絡先を交換した小山さんからメールがしつこい。ウザい。かなり

昨日自宅に帰つて携帯を開いてみたら”新着メール 19件”的表示。

訝しみながら、受信ボックスを開いてみると全て小山さんからのメール・・・

ではなかつたけど、それでも10件は来ていた。あと9件はメールマガだ、無駄に多い。

連絡先交換してから半日も経つてないのにである。

しかも、内容がものすごくどうでもいいものだつたりする。

なぜ彼女がぼつちになつたかがわかつた気がした。

しかし、彼女の本気はここからだつた。

帰宅して小山さんからのメールを打つてそのまま風呂に入つてから、メールを見た、また10件来ている。

なぜ、一つの返事ないのに新しいのを送つてくるのだらうか？

しかし、ここで無下に出来ないのが俺である。

一つ一つにキッチンと返事の内容を書いて送つたのだ。それがいけなかつた。

今自分が何をしているのか、コレからどうするかが一々事細かに書いて送られて來た。

今から夕食を食べるとか、コレから宿題するなど

一時間に必ず100通以上はメールをしてくる、俺のことほつたく聞きもしてくれなかつた。心情的には初めて会つ親戚のおばちゃんにずっと話しかけられてる気分だつた。

そんなメールは1時頃まで続いた。終わりは唐突に”今から生配信してから寝るから”だけでおわった。

翌日（今日）、基本的に早めに寝る俺は昨日の慣れないメールと遅くまで起きていたせいできつと授業中も休み時間も寝ていてた。まあ、俺がずっと寝ていた所で誰かに不思議がられたり、心配をかけたりすることはない。それが友達のいい所だ。

放課後、俺は「昨日家に来い」としか昨日言われてないのでびびすればいいか悩んでいると携帯が鳴った表示された名前は”小山 悠佳”

内容は午後4時にベースを持つて学校近くの公園に来いというものだった。因みに今は午後3時26分だ、家までは15分掛かる。まあ、4時にはちときつい。だから、少し時間を遅くして欲しいとメールする。

帰つて来た内容は”なんであんたを待たなくちゃいけないの？4時しか認めない”という内容を実に10行近くの文章で書いてきた。仕方ないから諦めてダッシュで自宅に向かう、とりあえず一番手前にあつた服といつも弾いてるベースを担いで学校の近くの公園に誰かに見られない様に裏道から向かう。

到着時刻午後3時58分ギリギリだ。

「遅い、あたしをあんまり待たせないで」

今日会つて第一声がこれだ。なかなか理不尽な女である。まあ、この俺に反抗する気概なんてあるはずもなく

「ああ、待たせてごめんな」

と、素直に謝つてしまふ俺はやっぱりヘタレだと思う。

そこから以外と少ない小言を言われながら、彼女の家に向かつた

10分程で到着した小山家はまあ普通の家だった。
でかいわけでもない、ごく普通的一般家庭だった。

「じゃあ、行きましょう

と、下に続く階段に降りた。

すげえ、地下があるよこの家・・・見た日普通の家なのにすげえ
しかも、防音だぜ・・・

本物の金持ちは見えない所で金を派手に使ひうるしげ、ほん
とのようだ。何気に金持ちなのか・・・

地下の部屋に入つてみると、普通のスタジオっぽかった。

「ちょっと、機材の用意するから待つて」

と、俺を廊下に残して部屋で何やらじこむをする小山さん。

よく考える結構スゴいことになつてないか?

だつて、この間までただの地味系ボツチ仲間だと思っていた(一方
的に) 小山さんが、今じゃ理不尽で前衛的なネットアイドルだぜ?
人間の人生とは、わからないものだ。

なんて、しょうもないことを考えてたら小山さんが

「準備できたよ」

と、声をかけて来た。何気に着替えてメイクしてるし・・・
すっかりネットアイドル“ゆゆ”だ。

「じゃあ、始めようか」

こつして、俺は初めて人前でベースを弾いた。

第3話 僕のやがて もの（後書き）

やつぱり、俺には小説書くのは向こむことやつぱり。
あと、レッチャのフローはまつぱりことやつぱり。

第4話 僕のでぶー その2

呼ばれてスタジオに入ると
「なんか、被り物でも着ける？」

と、聞かれた

正直結構迷ったけど、顔を映さない範囲でカメラに入る所で弾くこととした。

「んじゃあ、始めるね」

「え？」

何弾けばいいかとか、聞いてないし！――

そんな、俺を他所にすっかりネットアイドル“ゅゆ”になる小山さん

「みんな！こんにちわ！」

うわつ、すげえ猫なで声だよ・・・

「そ、なんだよ。夕方の放送はかなり久々なんだよお」

「配信のお知らせをあんまりい大きくしてなかつたのにい、結構みんな来てくれてるねえ！ゆゆ嬉しい」

気持ち悪過ぎるだろ・・・

さつきまでのあの理不尽女じ行つたんだよ・・・

「なんと！今田はね、私の友達が来てます！――」

え？俺の出番なの？――

「ナオ君でえす！」

きめえつて！―つか、俺の母さんみたいな呼び方するなよ！――

「ど、どいつもお～、な、なおです」

すげえ、何コレすげえ緊張するんですけど――

「いええ～い、拍手う」

なんで一々語尾が小さくなるんだよ！

「ナオ君はねえ、ベーシストなんだよ！――」

なんか、紹介されどるでえ・・・

「それでえ、今日は私の歌とナオ君のベースを聞いてもううつと弾います！拍手う！パチパチ！」

「え？ なに弾くの？」

至極当然の質問をする俺。

「これだよお！」

流れて来たのは恐らくボーカロイドの曲であるうモノ
しかし、これは・・・

「ごめん、聞いたことない」

「ええ？！」

マイクを切つて俺を急いで外に引っ張る小山さん。

「ちょっと、なんでこんな有名な曲聞いたことないのよ！」

「いやだつて、ボカロ曲なんて興味ないし・・・」

「あんたつて、オタクじやないの！？」

なんて女だ、ほっちは皆オタクと思つてやがる・・・

「大丈夫だよ、一回も聞けば口ピ一出来るから。それまで適当に繋いでて」

信じられないといつ顔をする小山さん。

「わかつたわ、直ぐに来なさいよ」

「出来たぞ」

「え？」

案外簡単な曲だったので、すぐ出来た。

驚いた顔の小山さん

「そ、そ。それじゃあ、やひつかしら」

若干素に戻つてるぞ・・・

それから、せつきのボカロ曲を弾く俺。

そこに小山さんの綺麗な歌声が重なる。

性格は悪いが綺麗な声である。神は「賦を」「えはしなかつたようだ。まあ、性格までよかつたら惚れそうだな。

そんな、どうでもいいことを緊張を解す為に考えながらベースを弾

いていた。

結局、その後何曲かを一人で演奏した。
そのまま、ギャルグーみたいなイベントが起きる訳もなく、普通に
帰宅する所だつた。

「今日はお疲れさま」

「あ、ああ。お疲れ」

「篠崎君以外にベース巧くて驚いたわ」

「いや、友達いないから・・・」

「ああ、そうか」

とても、納得した顔の小山さん。

自分で言つといてナンだが、結構イラッとする

「ね、ねえ、篠崎君・・・」

返事をせず顔だけ振り返る俺。

何か言い辛そうな小山さん。

「ど、どうしたの？小山さん」

「あ、あのね？わ、私とね？」

ん？もしかして告白か？

と、少し期待しつつ小山さんを見る俺。

「バ、バンド組まない？」

まあ、そんな筈もなかつたわけだが。

第4話 俺のでぶー その2（後書き）

なんか、小山さんのキャラを少し迷っています・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0949ba/>

ぼっちは俺がスターになるまで

2012年1月14日20時48分発行